桜門体育学研究　45(2)：93−96，2011

桜門体育学会平成22年度大会シンポジウム

「桜門体育学会のこれまでとこれから」実施報告

慶應義塾大学　近藤　明彦（シンポジウム司会）

これまで日本大学文理学部体育学科の内部組織として，学術雑誌である「桜門体育学研究」を発行することを主たる事業としてきた桜門体育学会は，平成22年度より体育学科の外部組織と位置づけられた．そして「桜門体育学会・平成22年度大会」は学会改組第1回記念大会として平成22年12月12日に行われた．シンポジウムにおいては桜門体育学会のこれまでの歴史を振り返るとともに今後の方向性・可能性を示すことができればという意図のもと，5名のシンポジストにそれぞれの専門分野での活動やこれまでの経験を踏まえたテーマで話題を提供して頂いた．シンポジストは吉本俊明（日本大学文理学部），鈴木典（日本大学松戸歯学部），渋倉崇行（新潟県立大学），下河内洋平（大阪体育大学），水落文夫（日本大学文理学部）である．通常の学会のシンポジウムであれば専門性の高いある程度範囲が絞られた内容についてディスカッションを深めていくのが常であるが，今回は本学会の今後の活動の方向性を示そうという意図のため，各シンポジストから桜門体育学会の今後の活動の可能性について，様々な提言を頂くこととした．各シンポジストの発表要旨は次の通りである．

まず吉本俊明先生は「桜門体育学会のこれまでの活動とこれからの夢」というテーマで，1958年の体育学科創設以来の流れの中で，桜門体育学会の原点と見られる学術研究発表会が1960年当時から行われてきた事や，卒業論文抄録集が1962年から発行されてきたなどの興味深い話題を提供された．つぎに体育学科内での共同研究，学部間での共同研究などを通して実際に学会発表や機関誌への投稿が行われた事例を紹介された．特に大学体育不要論が論じられていた頃に日大の各学部（商学部，理工学部，文理学部）に所属される先生方が共同で行った学生の体力レベルに関する研究発表は高い評価を受けたことから，桜門体育学会の日大内での横のつながりと大切さが伺われる．また，体育学科のスタッフが関わって立ち上げられた学会の例や大きく関わってきた学会の例として，日本スポーツ心理学会，スプリント学会，コーチング学会，健康行動学科学会，フットボール学会などを挙げられた．

また，これまで紹介してきた諸活動がいろいろな形で社会貢献をしてきた事実を踏まえ，これらの活動に多くの可能性を見いだしていきたいとされた．特に本学会は少なくとも日大に関わった人たちの学会であることを認識し，横の関係の大切さについて強調された．本学会活動に関心を持った会員，準会員が積極的に参加できる機会が持てるように，情宣活動の充実が必要であり，改組にともない会費収入確保の必要性にも言及された．また，個人研究も必要であるが，いろいろな研究領域の会員や指導現場で活躍する会員を擁する本学会では，それぞれの専門を生かしたチームを作り，指導現場にフィードバックできる研究を多く準備することによって，この学会を積極的に利用する集団になるものと指摘された．

二人目のシンポジストの鈴木典先生は「学会主導プロジェクト研究展開の可能性」のタイトルで，桜門体育学会の母体である日本大学体育学科の特徴について言及された．まず体育学科の教員の多くは高いレベルで全国のスポーツ教育や競技場面で活躍していること，そして学生も全日本学生選手権大会から国際競技会まで，高い競技レベルを誇る学生が多く在籍していることを述べ，同学科に基盤を置く本学会としてはこういった特色を踏まえ，実践性の高い研究活動を中核に据え，学会主導のプロジェクトを共同研究として構築して展開することが必要であるとされた．その上で学会主導プロジェクトを行うために不可欠な研究費取得にあたっての申請条件や申請のポイント（研究の独創性，社会還元の可能性など）について述べた．具体的な基金には，科学研究補助金（文部科学省，独立行政法人日本学術振興会），日本大学学術研究助成金

（総合研究：学部間の共同研究），日本大学人文科学研究所助成金（文理学部の教員を中心とした共同研究）を示した．そしてこれまでの共同研究の実践例を挙げた．これらのプロジェクト研究の特徴は「アカデミックレベルを維持しつつ実践性の高い研究を推進」するものであったとした．さらに次の４つの学会主導プロジェクトの要件を示された．それには，①教育効果やスポーツ競技力向上に直接的に寄与出来る研究テーマの設定　②教育現場からは教員，スポーツ競技現場からはコーチが共同研究者として参加　③個人を対象とした縦断研究を重視　④教育やスポーツ競技を実践する生徒や学生，教員やコーチが理解し易い研究成果の還元（フィードバックシートの整備）があるとされた．

三人目の渋倉崇行先生は「アクティビティが高い研究グループの活躍　－スポーツ動機づけ研究会の活動を例として－」としてご自身の研究分野であるスポーツ心理学分野の研究会である「スポーツ動機づけ研究会」の具体的活動を紹介していただくとともに，桜門体育学会の今後の活動への提言を頂いた．まずスポーツ動機づけ研究会は2002年にスポーツ心理学会で開催されたミニ・シンポジウムを契機に発足した研究会であり，主な活動として，定例研究会（年１回開催），日本体育学会体育心理専門分科会会報への掲載，日本スポーツ心理学会におけるシンポジウムあるいはRTDの企画等を行っているということが紹介された．研究会の活動内容としては「一般口頭発表」，「シンポジウム」，「キーノートレクチャー」，「ワークショップ」，「フレンドリー・フィジカル・アクティビティ」，「懇親会」等の企画があり，参加者・企画数とも概ね増加傾向にあり，多くの大学院生が参加していることも特徴であるとされた．そして，スポーツ動機づけ研究会の特色として①アットホーム（心に安定感）②若手研究の推進（新規性）③討論に多くの時間を費やす（多くの収穫）④様々な企画（好奇心を刺激）⑤出会い（研究仲間）⑥アイディア（新たな発想）⑦動機づけ（知的好奇心，勇気，元気，使命感，危機感→研究生活の原動力）があるとされその重要性を強調された．このなかでも特に学部生や院生など若手研究者の活発な活動（討論や情報交換），ならびに高いレベルの競技者や競技経験者を交えてのディスカッションが研究の原動力になることを示された．最後に桜門体育学会の今後の発展に向けた提案として，①研究集会の充実，②学会員の交流の２点が学会員の研究活動の推進につながるとされた．さらに学会の課題として，①広い研究領域の扱い（領域間のバランス，個別性）②日大のリソースの活用（競技者，コーチ，隣接学問領域）③会員の価値感（いかにメリットを感じてもらえるか）などを念頭に入れる必要が有ることを示された．

四人目のシンポジストの下河内洋平先生は「最新スポーツ医学研究とその現場還元の課題－日米の現状比較を踏まえて」として，ご自身のアメリカ留学時代の研究成果の紹介とスポーツ医学の最先端についての話題を提供していただくとともに，研究成果の現場への還元についての可能性について述べられた．

まず，現在のスポーツ医学界での最も大きな研究テーマには，膝関節における非接触性前十字靭帯（ACL）損傷メカニズムの解明とその予防法の開発が挙げられ，欧米においては，近年ACL損傷メカニズムを検証する基礎研究に特に焦点が絞られてきていることを示された．下河内先生らの研究グループは非接触性ACL損傷メカニズムの理論を提唱し，その理論を基にACLへ過度なストレスを与えない着地技術や神経筋コントロールの検証を行ってきたこと，そしてACL損傷の発生率を高める危険因子がどの様に非接触性ACL損傷メカニズムに影響するかということを検証する研究を始めていること等を紹介された．これらの一連の研究は，最終的に得られた知見を実際にスポーツ現場へ還元することを目標に行われており，実際にそのような試みが始められていること．例えば非接触性ACL損傷が頻繁に発生する女子バスケットボール部や女子ハンドボール部に対して，一連の研究から得られた知見を基に考案されたACL損傷予防のトレーニングを実施し，一定の効果をあげつつあること．またACL損傷予防に関する研究成果はACL再建手術後のアスレティックリハビリテーションにもそのまま応用できることなどを挙げ，大阪体育大学のアスレティックトレーニングルームにおいてはACL再建手術後の選手に対して提供されるアスレティックリハビリテーションプログラムは，これらの研究成果からの知見が基礎となっていることなどを紹介された．

アメリカに於いてはその制度上研究成果をスポーツ現場へ還元する試みに対して様々な困難が付きまとう現状と比較すると，日本に於いてはスポーツ科学とス

ポーツ現場を結ぶような試みを行えるなど，研究者と実践者の両方を有し，比較的自由な形で研究活動を行える日本の体育系大学は大きな強みを持つことを指摘された．今後桜門体育学会が更に発展して行くためには，身体運動のメカニズムを解明するような基礎研究の重要を見逃してはならないことを強調され，そのことだけでなく基礎研究において構築された理論の効果を実際に検証する事例研究や介入研究を同時に奨励された．このようにスポーツ科学とスポーツ現場を繋げる試みを盛んにしてゆくことが重要であろうと締めくくられた．

最後に，水落文夫先生は「組織としての桜門体育学会のあり方」として，桜門体育学会の現状（会員構成：会員365名［うち，大学体育系教員73名，日大体育系教員47名］，準会員［体育学科学部生］1090名）について，その人的構造とヒューマンリソース活用の可能性，そして，学会の組織機能と活動の可能性について説明をされた．

まず，「人的構成と関連資源」として現状の桜門体育学会会員の構成と，その背景にあると推測される研究・教育資源を示した（図１参照）．人的構成としては，日大14学部の体育教員，体育学科あるいは大学院教育学専攻を卒業した他大学体育教員，小中高教員，各競技団体やJISS，体協などの機関に勤務する学会員など多岐にわたることを明らかにされた．さらに，現大学院生と体育学科学部生（準会員）の学生も構成員であることを示された．研究者だけでなく，むしろ競技や教育の現場で活躍されている方が多い多様・多彩な人員構成であることから，これらの人々を有機的に連携させることにより，体育学科に所属するスポーツ選手を始めとして，様々な研究や教育のための資源を共有できる可能性があることも示された．

桜門体育学会は現状で４つの常置委員会にて運営されているが，この委員会に次の様な機能を付加することにより，今後の活動をさらに発展させることができるとして，次のような提言をされた．

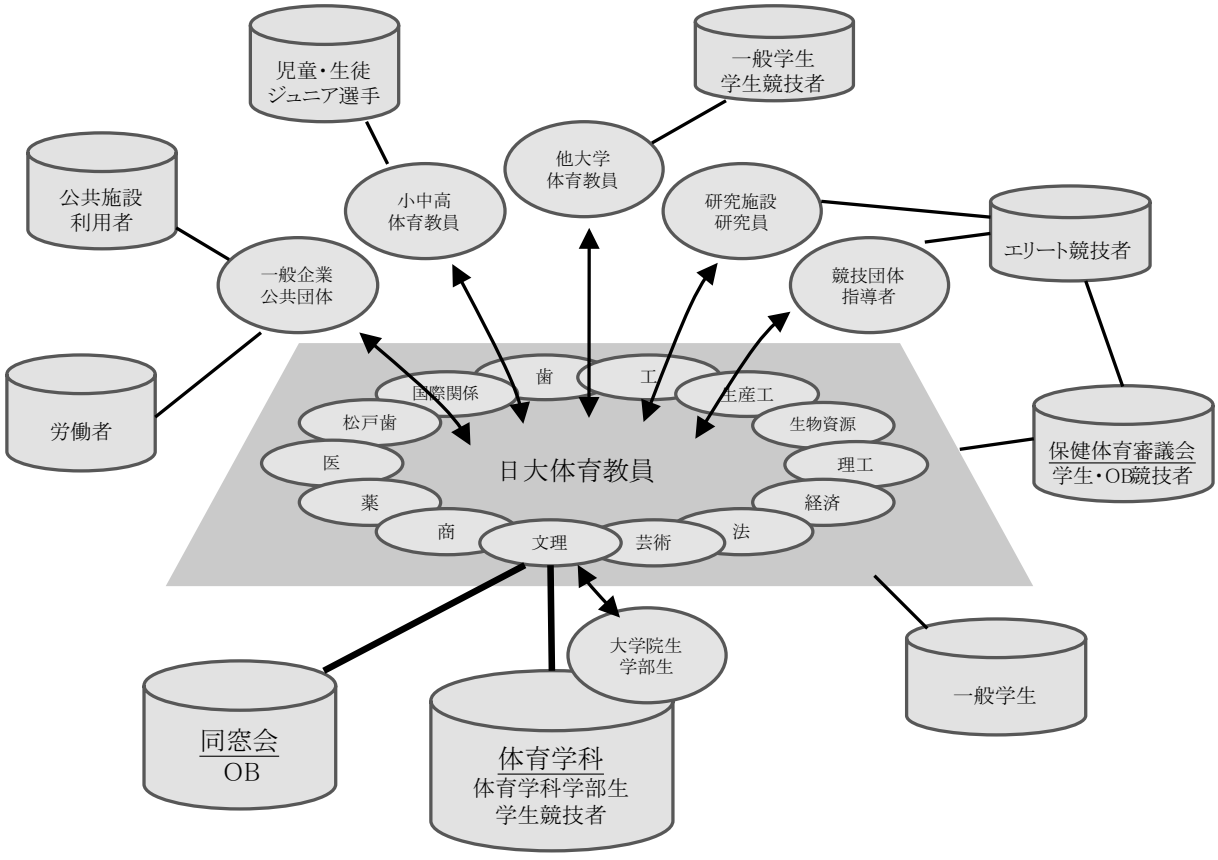

図１　桜門体育学会の人的構成と関連資源

まず，研究支援機能については，研究委員会下に分科委員会（研究グループ）を設置するなどの試みにより，①スポーツ科学に関わる研究者，指導者，教育者の掘り起こし，②会員の研究活動への参加と道筋の提供，会員のアカデミックレベルの向上，③研究業績の獲得（学会発表，論文投稿，著書など），④会員の連携による研究テーマ，知識，施設，資金，被験者等の共有，⑤研究補助者（大学院生や学部生）の派遣，といった研究活動の促進が期待できるとともに，学習機会や研究活動環境の提供により，若手研究者の育成を図ることが可能となる．ただし，研究グループを研究委員会主導で構築しても，形骸化していくことが予想されるため，リーダーシップをとれる会員が提案し，隣接研究領域を含めて興味ある会員が集うという，自然発生的な形成を促す環境整備が必要とのことであった．さらに，編集委員会下にデータベース委員会や出版等委員会が組織されることにより，研究・教育・指導者データベースや研究・教育報告データベースの構築が可能となり，研究支援ツールの提供（研究手引きなどの作成）や共同での著書・訳本出版の補助といった事業の活性化が期待されるとしていた．

次に，教育支援・社会貢献機能としては，①学部生（準会員）に対する学習機会の提供，②教育現場，競技現場に対するアカデミックレクチャー，③指導者，教育者の派遣，④教育現場，競技現場への補助者（大学院生など）の派遣，という機能が企画・広報委員会下に社会貢献委員会を組織することにより期待できるとされた．

現段階で，これらの提言は可能性を列記したのみであり，すべての期待される機能を推進することは困難であると指摘された．しかし，今後は会員の方々が学会のいずれかの機能に魅力を感じ，自らの資源を提供しつつ，学会からも恩恵を得て，学会を支える当事者であることを自負できるような機能を優先して，少しずつ学会機能を充実していく必要性を強調された．

シンポジウムの演者．左から，吉本俊明先生，鈴木典先生，渋倉崇行先生，下河内洋平先生．右端は司会を務めた筆者．